

自閉症児に対する音楽療法

野 尻 恵美子

(2007年1月31日受理)

I. はじめに

本対象児は自閉症と知的障害を併せ持つ、現在4歳2ヶ月の女児である。問題点としてコミュニケーションが乏しく、相互交流が困難であるということがあげられた。

音楽が治療道具として使われる特性は様々あげられるが、音楽は知的過程を通らずに直接情動に働きかけるので、他者との交流が困難であり、言語交流が出来ない対象児に非言語的なコミュニケーション手段として音楽を治療に用いることは有効であった。

松井は自閉症児への治療過程を次のように述べている。まず①初期の強い自閉性の段階がある。この段階では、受容的な姿勢が求められ、治療するものと対象児の好ましい関係樹立が当面の課題になる。ここでは治療者（以下Th）に全く関心を示さず、道具にのみ固執する段階から、Thを道具的に使用したり、ものとしてのThを要求するような段階がある。その中で、対人的刺激を快刺激として受けとることが出来るようになるまでは刺激を制限して、慎重に選択的に与える必要があり、刺激に対する安心感を持たせることが重要である。次に②Thへの関心が起こり、安心感が形成された段階に移る。この段階では、一定の刺激投与とその受容が学習されたら、少しずつそれを発展させ繰り返し経験を統合していく援助を行う。ここでは感覚運動段階での経験を十分に記憶させ、早急に言語表現に導くような訓練は差し控える。そして非言語的な水準の交流であっても、交流と見られるものには必ず対応し、対象関係樹立への促進をはかる。そして③治療関係が樹立さ

れ、言語的、非言語的交流が行われる段階へと移行する。ここでは課題学習がテーマになってくる。たとえば言語表現が無くても交流は根気良く継続され適応的な行動が獲得されるようになるまで指導は継続される。

D. W. ウィニコットは、一者関係つまり自と他の区別もなく、極めて主観的で未分化な対象関係しかない状態から、自己と区別される全体的な対象としての母親像が確立させる状態である二者関係への移行過程では移行現象とか移行対象がみられるとした。これは幼い子どもが肌身はなさず持ち歩く毛布や人形、動物のぬいぐるみなどを指し、それをウィニコットは最初の「自分でない」所有物という発達の位置付けをして移行対象と名づけた。ここでは幼児の喃語やもう少し年長の子どもが口ずさむ子守歌やメロディーも同じ機能を果たすとされる。これは一者関係から二者関係移行、その中間に位置する体験である。

II. 目 的

対象児はコミュニケーションが乏しく、対人的相互交流が困難であり一者関係の水準であった。そのため、対象関係の機能とそれによって発達してくるコミュニケーションとしての言語の獲得を目標に個人セッションを行った。本研究では、先に述べた治療過程において、言語を使わない音楽という活動を通して一者関係から二者関係の水準に発達させ、それに伴いかに言語コミュニケーションを獲得していったか分析、検討することを本研究の目的とする。また治療過程で音楽が移行対象としてどのような役割を果たし、対象関係の発達の援助として活用されたかも報告する。

Ⅲ. 方 法

① 対象児について

対象児は平成14年10月生まれの女兒であり、現在4歳3ヵ月である。家族構成は両親と対象児の3人家族である。対象児が2歳9ヵ月の時、歌は歌うが会話にならないと異常に気づき受診、自閉症および知的障害と診断され、療育指導機関に通園している。そこでも音楽療法および作業療法を受けている。

〔治療開始時の様子〕

治療開始時の対象児は3歳7ヵ月であった。交流状況は言語発達に遅れがみられ、あってもおうむ返しなど内容伝達を伴わないものが目立った。指示に従って行動することも無かった。非言語的交流は、視線が合うこともあったがThと音楽活動などを共に楽しむことは無く、Thに対する関心は薄く模倣も無かった。両親との交流はあるようであったが他の子どもや大人とは対象児の要求に基づいた反応を見せるのみであった。特に他児との相互遊びは困難であるということであった。運動面は歩行や走ることは可能であるがバランスが悪く転ぶことが多く、トランポリンの1人での跳躍も不可能であった。手の操作に問題は無く鈴やタンバリン、マラカスなどの小楽器、太鼓などをリズムカルに鳴らしていた。目立った行動特性としては、落ち着きが無くひとつの活動が長続きしなかった。次から次へと楽器を取り替え部屋を走り回り、足元に注意しないため楽器につまづくこともあった。しかし音楽には興味があり1人で歌を歌っていることが多く、Thのピアノにも反応しリズムカルに踊ったり楽器を鳴らしていたが、共に音楽を楽しむという感じは無く、対象児ひとりの世界で自分の音楽を楽しんでいるという印象が強かった。メロディの記憶と再生能力は高くThがある歌の演奏を途中で止めると最後まで弾くことを要求した。

② 治療構造

期 間：

平成18年5月～平成19年1月 計20回実施

頻 度：

週1回40分の個人セッション

人的構造：

Th（筆者）コワーカー（以下Cw）1名、母親は同室であったが活動に参加することはなかった

場 所：

仁愛女子短期大学音楽館

楽器・遊具：

キーボード、鈴、マラカスなどの小楽器類、太鼓類、鉄琴、木琴、ミュージックパッド、トランポリン、絵カード、歌の絵本

Ⅳ. 経過と結果

対象児の変化に伴い3つの期間に分けて治療過程および治療結果を述べる

第1期 受容の時期

この時期は対象児にThに対する関心を持たせ、治療関係を樹立させることを目標においた。対象児は人見知りすることもなく入室し、次々に楽器を鳴らしていった。セッション開始時に椅子に座るよう指示したが応じず1人で歌いながら楽器を鳴らした。しかしひとつの楽器に集中することはなかった。人には興味はないが自分の歌に合わせて楽器を操作することへの関心は強く、自分の世界の音楽を楽しんでいるという印象であった。何を歌っているかは不明であったが、Thは対象児が好みそうな歌や普段歌っている歌をキーボードで演奏した。これは対象児の欲求を満たし、受容することにより安心感を与えた音楽を通しThに対する関心を持たせる目的で行った。すると対象児は更に積極的に楽器を鳴らしThの音楽を受け入れ快刺激としての反応を見せた。キーボードを弾いているThに近づいてくるようにもなった。S2からはチューリップ、猿、ぞう、猫などの絵カードを対象児に提示し、曲と視覚情報を一致させる活動を行った。その際対象児は絵カードを見てその名称を発語していた。じきにCwのモデリングを模倣することで、弾いて欲しいカードを指差しながら発語しThに要求するようになった。「ぞうさん」「ちょうちょ」「チューリップ」と言いながら指差し、猿のカードに対しては「アイアイ」と要求した。またミュージックパッドをCwから受け取り、それをThに手渡すという行

動も見られるようになった。S 4になると絵カードがなくても弾いて欲しい曲を言語で要求するようになった。「チューリップ」「ちょうちょ」と言い、その後Thが「弾いて」と言うことを促したり「もう1回?」と尋ねると対象児もそれを模倣し、発語しながら人差し指を立ててThに伝えた。Thは対象児のそれらの要求に応え、歌いながらキーボードを演奏していった。対象児はCwが行うことを模倣したりおうむ返して発語していたが、その内容ははっきりしないため、Thが対象児に同一化しその欲求を直感的に読み取る能力を必要とした。その中で対象児のリクエストは次々に増え対象児にとってThは自分の要求を満たしてくれる道具として機能するようになった。Thの音楽に合わせ対象児は様々な楽器を鳴らしたが、そのリズムはThと一致していることが多かった。

このように第1期ではThが対象児の持っている音楽を受容し、それを返すことで欲求充足の対象として音楽を通してThに対する関心を深め、次の段階として音楽を提供する道具としてThを認知し治療関係を形成することが出来た。そのなかで要求方法として言語の使用がみられるようになったがそれはThに向けられてのものではなかった。

第2期 リクエストが活発な時期

第1期でThは対象児の欲求を満たしキーボードを弾く道具として対象児に認知されることでの治療関係は樹立した。この時期では更に対象児の好む曲のキーボード演奏を要求することが増えていった。第2期では音楽でのコミュニケーションを更に促進させその音楽を提供している対象としてThの存在を認知する二者関係への移行、またそれに伴い模倣ではなく対象児の自発的な言語での要求を引き出すことを目標においた。リクエストされる曲も増え「ひな祭り」を行った際、Thが1番のみで終わると対象児は「着物・」「金の・」と2番3番の出だしを歌い最後まで演奏を行うことを要求した。「ミッキーマウスマーチ」を行った際対象児は太鼓を叩いたが、その時これまでに見せたことのない笑顔で叩いた。共に音楽を創造していく中で対象児と情緒的にも交流していると

いう印象をこの頃から持てるようになった。また対象児はThのキーボードに合わせ隣に並べて置いてあるピアノを弾くことを好むようになった。「靴がなる」を要求することが多かったが対象児のリズムはThのものに合っていた。対象児は非常に楽しそうで、弾きながらThの顔を凝視することも見られるようになった。第1期では対象児の要求をThが一方的に満たしていたのみであったため対象児にとっては自分の音楽とThの音楽の区別がない状態であったが、この時期になるとお互いの音楽を区別し始め、道具としてのThから、共に音楽を楽しむ相手としてのThとして対象児に認知され始めたのだと推測された。そしてThはこれまでのように対象児の要求を読み取りそのまま応える段階から、対象児が「～弾いて」とThに言語で伝えるまで要求に応えないという状況を作った。対象児にとってはすぐに欲求が満たされないため、Thの手を鍵盤に押さえつけることで何とかして弾かせようとしたが、Thはあえて欲求不満の状態を作ること対象児の言語発達を促したいと考えた。すると徐々に曲の名称をThに伝え「鈴」「カステネット」「先生弾いて」「もう一回」などおうむ返しでない対象児の言語が増えていった。この頃活動にトランポリンが加わり、対象児はThが弾く「かえるの歌」の歌詞を変えた「トランポリンの歌」に合わせCwと手をつなぎ跳ぶようになった。ここではThが曲を弾き始めないと対象児も跳び始めないというルールを作った。するとThの顔を見ながら「先生弾いて」「もう一回」と自発的な言語コミュニケーションがみられ、その際も対象児はThに非常に楽しそうな笑顔を見せた。対象児の中でThの音楽とそれに合わせる跳躍という自分の行動がはっきり区別でき、曲の始まりと終わりの認知も可能になっていった。この時期の後期では対象児の音楽表現も多様になり、「大きな太鼓」の歌詞に合わせて大小の太鼓を使い分けて演奏することもみられた。そして楽器やトランポリン等を片付けることや「鈴ちょうだい」などの言語での指示に従って行動することが可能となった。またセッション開始の歌での挨拶の際にThが名前を呼ぶと「はい」と言って手を上げて返事をするようになるなどの言語

交流もみられるようになった。

このように第2期では対象児のリクエストに基づき、音楽でのコミュニケーションを充分に行うことで情緒的交流を深めることが出来た。そして発達段階に応じ、対象児にとっての音楽の役割を欲求充足としての道具から、欲求不満を与える道具へと変更させていくことで言語コミュニケーションに導くことにつながったと考えられる。また対象児自身が表現する音楽とThから提供される音楽の区別が可能となり、一者関係から二者関係への水準へと移行していった。

第3期 音楽による相互コミュニケーションの時期

第2期の音楽活動を通して対象児は自分の音楽とThの音楽の区別が出来るようになり、Thを他者として認知するようになった。そこから言語コミュニケーションを促進させることが出来た。第3期では更に対象児自身の要求を言語でThに伝えることを促しながら音楽活動を発展させることで二者関係でのコミュニケーションを発展させることを目標においた。歌唱活動や合奏を行うことで他者(Th)への関心を深め、Thの音楽およびTh自身を自己と区別した全体的な対象として認知させることが可能であると考えた。合奏では対象児が要求した「あわてんぼうのサンタクロース」を多く行った。Thはキーボード、Cwはタンバリン、対象児は1番から5番まで、カスタネット、鈴、太鼓などそれぞれ違う楽器を選択して行った。自分が他者とは違う様々な楽器を担当していることやそれぞれの楽器の音色の違いを楽しんでいた。その際対象児はThのテンポ、リズムに合わせて楽器を操作し更に歌も歌っていた。それまでの対象児は曲をリクエストした際、楽器をその曲のリズムに合わせて叩くことはあっても、それに合わせて歌うことはなく歌は好き勝手に歌っていた。しかしこの時期では明らかにThのキーボード演奏に自分から合わせるようになった。そしてこの頃から対象児は歌の絵本を持参するようになり、その中から好む曲を言語でThに要求するようになった。「靴がなる」「夕焼け小焼け」「ゆりかごの歌」を多く行ったが、その際も対象児はThに合わせて大きな声で歌った。Thの

キーボードに合わせてピアノを弾くことをこの時期も好んだが、そこでもThに合わせての歌唱も伴っていた。その他「ミッキーマウスマーチ」ではThのキーボードに合わせて、対象児は鈴、Cwはタンバリンをリズムカルに叩きながら行進する活動も行うようになった。これは音楽に合わせて自分自身の行動をコントロールすることが可能になったことを意味し、全体的な身体像の認知につながったと推測される。このように以前から対象児は音楽を好み楽器を叩いたり歌を歌うことはみられていたが第3期になると自分だけの世界で音楽を楽しむのではなく、Th、Cwを意識し共に音楽活動を行う楽しさを獲得し、音楽を遊びとして楽しむようになった。この時期の後半では対象児はキーボードを弾いているThの膝の上に乗し、キーボードのボタンを操作すると様々な音色に変わることを発見し、色々な音を楽しんだ。このような二者関係での遊びを通したコミュニケーションの発展により、セッション開始と終了の挨拶がはっきり言えるようになったり、自分の要求をはっきり伝えるなど言語コミュニケーションの発達を促進させることにもつながった。またこれまでセッション中に対象児が母親に甘えたり「ママ」と声かけすることはみられなかったがこの時期の後半では活動の合間に母親の基へ甘えに行ったり、「ママ、ママ」と母親を呼ぶようになった。これは対象児がセッションの中で自分のものではないThの音楽を発見し、そこから全体的な対象としてのThを認知するようになったように、母親像もはっきり区別して認知するようになったことを意味すると推測される。

以上の治療過程を経て長期目標にあげた、一者関係から二者関係への移行、それに伴う言語コミュニケーションの発達を促すことが出来た。

V. 考 察

① 移行対象としての音楽

本対象児にとっての音楽はまさに移行対象としての意味を持っていた。移行対象に関するウィニコットの認識は、彼の錯覚と脱錯覚に関する理論を基礎にしており、錯覚移行現象は一者関係から二者関係への移行、その中間に位置する体験であ

る。ここでいう一者関係とは自己愛的主観的な幻想の世界であり、二者関係の段階は外的対象の存在をそれ自体として認識することが出来、内的現実と外的現実の境界の認識の確立した段階を意味する。そして対象に対する「錯覚」とは自分にとって良いものをすべて自分のものと幻想する自己愛的段階から、自分から独立した自分の思い通りにならない客観的な外的存在を認識できる段階への移行期における、客観的にみると外的存在でもある良い対象を同時に自分のものとして知覚する体験である。その基本的な認識は、客観的には外的対象である母の乳房を乳児が主観的に自己のものと錯覚する体験の分析に発している。乳房は幼児がその愛する能力と欲求から何回も繰り返し創り出すものなのである。幼児にとっての母親の乳房は主観的現象として発達する。母親は実際の乳房を幼児が創り出そうとするその瞬間に据えるのである。それは幼児自身が創造したものなのか、母親から差し出されたものなのか、幼児の内部に属するものなのか、外部なのかを問うことが出来ない体験であり、錯覚なのである。やがて幼児の側に現実検討の能力が発達するとこのような錯覚からの「脱錯覚」が進む。幼児の自我は現実を受容する段階に発達していき、対象（乳房）を自己の外側のものとして知覚するようになり、二者関係の段階へと移行していく。

治療開始時の対象児は他者と交流することが困難であり一者関係の段階であった。対象児は自分自身で創り出した音楽を快刺激として自己の世界のみで楽しんでた。そこでThは対象児が音楽を創造した瞬間に同質の音楽を提供していった。この段階では対象児はThが提供した音楽と自分自身で発した音楽の区別は出来ておらず、Thの音楽も自分の一部であり、自身が幻想的に創り出した音楽として楽しんでた。このようにして第1期では対象児が自分自身のものではない、Thが提供した音楽を利用し楽しんでも、それが外的現実属していることを認識できないでいる状態－中間領域－を作っていた。そして第2期になると楽器活動の際、対象児の方からThのリズムに合わせることを楽しむようになり、自分自身が表現した音楽とThが提供する音楽を違うもの

として認識し始めた。更に自分のものではない外的な音楽を提供しているThの存在そのものを認識するようになっていき、合奏の際Thに対して笑顔を見せるなど情緒的な交流も深まっていた。このように音楽に移行対象としての意味を持たせ積極的に活用することで一者関係の段階から二者関係の段階へ移行することが可能であった。更に第3期ではこの中間領域での活動は「遊ぶこと」へと発達していき、対象児は合奏の際様々な楽器を使いTh、Cwと共に音楽を創造することを楽しむようになった。「移行現象から遊ぶことへ、遊ぶことから他者と共有する遊ぶことへ、また、そこから文化的体験へとまっすぐに発展していく。」1)「内的現実と外的（共有）現実のどちらに属するかを問い質されない、この体験の中間領域は、幼児の体験の大きな部分を占め、その後、生涯を通じて、芸術、宗教、想像力に富んだ生活、創造的科学研究等に付随する集中的体験の中に保持されていく。」2) ようにセッションの場が対象児にとって遊びの場となり音楽による相互交流を深めたことは対象児のコミュニケーション能力の発達にとって意義深いことであったと推測される。

② 言語発達を促した要因について

本セッションでは先に述べたように一者関係から二者関係への移行とそれに伴った言語発達を目標においた。第1期ではThは対象児が好む音楽を受容し同一化することで同質の音楽を提供した。それにより対象児に安心感を与えその後のセッションを円滑に進めることが出来た。そして対象児は絵カードの提示や言語模倣により音楽の要求方法を獲得していったが、この段階でもThはやはり受容の姿勢を保ち、対象児の要求に沿って音楽を提供した。Thは対象児にとって音楽を提供する道具となり、音楽は欲求充足の役割を果たした。このように音楽を提供する道具としてThに関心を持たせ安心感が十分に形成され、第2期になると対象児にとってThは道具としての対象から共に音楽を楽しむ対象として認知されるようになった。この段階になるとThは対象児の言語による要求がない限り、音楽を提供しないという姿勢に変化させた。対象児にとっては欲求不満な

状況も起こり、Thに対して攻撃性を向けることもみられたがこのような葛藤状況を作ることが対象児の言語発達を更に促進させるきっかけとなった。

ウィニコットはある程度自と他の境界が形成された段階から次のより発達した段階への対象関係の発達に関して「主観的な対象と関係すること」から「客観的な外的対象を使用すること」への発達という観点から次のように説明している。ウィニコットによる依存の諸段階における第1段階である、絶対的な依存の段階における幼児は主観的な経験の中で対象と関係する。このような主観的な対象は幼児の全能的支配下におかれている。ところが次の段階である、相対的依存の段階になると幼児は自分の欲求を信号として伝えるが母親は送られない限りそれに応えることが出来ないし、常に信号を正確に読み取って適切に対応できるとは限らない。つまり母親が幼児の欲求に適応することに失敗することも起こりうる。つまり幼児にとって対象が全能的支配のままにならないことが経験される。そして幼児はこの適応の失敗に対しての欲求不満によって対象に対して攻撃性を向ける。しかし幼児のこうした対象への主観的破壊にもかかわらず客観的な対象は生き残る。この経験を通して自己の全能的支配を越えた存在としての外的対象が確立され、対象の使用が可能になる。またこの失敗に対する幼児の憎しみ（欲求不満）が対象の創造過程で重要な陽性の役割を果たすとされる。

本治療過程の中では、母親ではなくThが音楽を媒介として対象児の対象関係の発達を促した。

第1期のThは、対象児にとって自分の要求を満たす存在として経験され、対象児の全能的支配下にあった。ところが第2期になると対象児が言語という信号を用いてThに音楽の提供を要求しない限り、Thは対象児の欲求を満たさなかった。特に対象児の言語をThが理解できなかった際は対象児の欲求に応えないThに対し、攻撃性を向けることもあった。このようにThが対象児の思い通りにならないことと、その一方で対象児のそばに一貫して存在しつづけて信頼関係を深めていったことにより、対象児はThを全能的支配を越えた存在としての外的対象として認知するようになった。ここでは音楽を、対象児に欲求不満を与える道具として機能させたことが重要であったと考えられる。

以上述べてきたように、一者関係の段階にいた対象児に、移行対象として音楽を使用することにより二者関係の段階へと移行することが出来、その過程の中での対象児の発達段階に応じて音楽の役割を変化させたことによって、目標にあげた言語発達も促すことが出来た。

引用文献

- 1) 2) D・W・ウィニコット 橋本雅雄訳 遊ぶことと現実 岩崎学術出版社 P.72 P.19 2000

参考文献

- 松井紀和 音楽療法の手引 牧野出版 1997
小此木啓吾 現代の精神分析 講談社学術文庫 2002
D・W・ウィニコット 牛島定信訳 情緒発達の精神分析理論 岩崎学術出版社 2002
氏原 小川他共編 心理臨床大事典 培風館 2000